慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	書評：閉塞感を突き抜けた希望の先の透明な明るさ： 山岸健・浜日出夫・草柳千早共編『希望の社会学』三和書房、2013年
Sub Title	
Author	江原, 由美子(Ehara, Yumiko)
Publisher	三田社会学会
Publication year	2014
Jtitle	三田社会学 (Mita journal of sociology). No.19 (2014. 7) ,p.127- 129
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評 目次のタイトル：「書評：山岸健・浜日出夫・草柳千早共編『希望の社会学』」
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11358103-20140705-0127

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

書評：閉塞感を突き抜けた希望の先の透明な明るさ

山岸健・浜日出夫・草柳千早共編『希望の社会学』三和書房、2013 年

江原　由美子

近年、「希望」という言葉は、社会科学の領域で、小さなブームとなっている。山田昌弘氏の『希望格差社会』、東大社会科学研究所の『希望学プロジェクト』、東日本大震災からの復興プロジェクト「岩沼千年希望の丘事業」等、「希望」をキーワードとした社会科学研究・復興政策が目につく。その背景には、ゼロ成長・マイナス成長が 20 年も続き、少子高齢化による人口減少によって、希望が持ちにくくなっている日本社会、東日本大震災によって大きな被害を受け、絶望の中から何としても「希望」を求めざるを得ない日本社会があるのだろう。だからこそ「希望の作り方」「希望の見つけ方」が求められるのだろう。本書のタイトル『希望の社会学』も、同様の試みではないかと思う人も、多いかもしれない。

けれど、そうした先入観を持って本書を読むと、その期待は見事に裏切られる。本書が背景としている問題意識の時間幅は、「失われた 20 年」や「災害復興」等の、数十年程度の短い時間幅ではない。近代という数百年の幅、さらには人類史数千年の幅等、長大な時間幅の中で、「我々は何者か、我々はどこへ行くのか」を考えることこそ、本書の背景にある問題意識なのだ。生きるということ自体に含まれている、未来に向かう視線、すなわち「我々はどこに行くのか」を見つめざるを得ない人間の、普遍的条件としての「希望」と表現した方が適切かもしれないような問題意識が、本書の根底にある問題意識なのである。

無論、現代を主な研究対象にする社会学であるから、本書には当然、現代日本社会の社会問題を問題意識とした章もある。戦後から現在までの家族の変遷を扱った章（第 5 章 渡辺秀樹「戦後家族の希望とそのゆくえ」）や、1980 年代から今日までの雇用を扱った章（第 7 章 鈴木秀一「仕事と企業組織の変貌」）等では、近年の「希望学」に近い時間幅で「希望」が扱われている。あるいは「希望学」のもうひとつの大きな主題となっている東日本大震災からの復興という「希望」を扱った章（第 9 章 干川剛志「災害－東日本大震災からの復興に向けて」）もある。それらの章では、現代日本社会に生きる我々の閉塞感・不安感・焦燥感を丁寧に論じられている。あるいは、現代社会の観察から「我々はこれからどこへ行くのか」を考えさせるような章（第 4 章 櫻井龍彦「だてマスク・自己・社会」、第 6 章 近森高明「無印化する都市空間」等）もある。これらの章では、現代日本社会の分析に焦点が据えられている。

けれども、本書の特徴は、そうした現代社会分析を挟み込む形で、日本社会から、あるいは現代社会から、十分に距離をとった視点で「希望」を論じる章が、配置されている点にある。その一つの視点は、近代という数百年の時間軸から「我々とは何者か、我々はどこに行くのか」

江原由美子「書評：閉塞感を突き抜けた希望の先の透明な明るさ　山岸健・浜日出夫・草柳千早共編『希望の社会学』」
『三田社会学』第 19 号（2014 年 7 月）127-129 頁

を考察する視点である。第 13 章では、近代的世界における「クロックタイムの成立と変容」（浜日出夫）が論じられ、第 8 章では「メディアとモビリティ」（田中大介）が、第 3 章では「感情」が主題化される（岡原正幸「感情に触れる－現代社会と感情」）。いずれも、私たちが「我々は何者か」を考える上で現代社会から十分な時間距離を取りうる的確な視点を、提示している。また 10 章、11 章、12 章では、現代社会における老病死を描きだす論考が続く（第 10 章 鈴木智之「病いの語りと医療のまなざし」、第 11 章 大出春江「生きられた老いの経験と語り」、第 12 章 澤井敦「死の社会的変容」）。いずれも、近現代における老病死が大きく変容していることが論じられる。「モダニティを問う」という問題意識は、まさに社会学という営みが始まったその端緒における問題意識であった。プロローグ「社会学の成立と展開」（山岸健）は、激変する近代社会の中で、「我々は何者か」を知るために「我々はどこへ行くのか」を問うた学問であったと論じている。

もう一つの視点は、人間の普遍的条件としての「希望」という視点だ。人が生きることは、必ず未来への投企を含む。未来の時間を把持すること、その未来に向けた行為を行うこと、そして生を前に運ぶこと、生きるとはまさにそうした営みである。未来が明るく輝いて見えようが、暗く沈鬱な気分に塗り込められているように見えようが、我々の身体はいやおうなく未来に向かって生を進めていく。身体そのものが時間的存在であり、生と死、成長と老化を含み込んでいる。第 2 章「身体・社会・太陽」（草柳千早）では、身体という観点から、社会的存在としての我々が相対化される。第 1 章「人間と大地／風景、音風景と音楽」（山岸健）では、世界が我々に日常生活世界として現れてくるまさにその根底に、生を前に運ぶ我々の営みがあることを描き出す。エピローグ「ゴーギャン、我々は何者か、／人間と世界）（山岸健）では、本書の表紙にも採用されているゴーギャンの同名の絵画が論じられる。これらの章では、「希望」は、将来に願望が実現するという「見通し」を意味しているわけではない。ここでは、「希望」は、何かを実現するという目的をもって生きること、すなわち行為し続けることそれ自体である。我々は誰もが、最期には死なざるを得ない生を生きている。我々にとって大切な人々もまた、死を避けることはできない。我々がこの世で何かを実現しえたとしても、誰もがそれらを全てをこの世において、旅立たざるを得ないのだ。人間の生が死を含みこんでいる以上、「願望の実現」それ自体は、個々の身体を生きる個人にとっては、常に幾分かの空しさを含みこんでいる。それゆえ「実現」にではなく、「行為し続けること」自体に「希望」を見出すことは、より普遍的な人間的条件であるように思える。

本書を読むと、「現代日本社会の閉塞状況を打ち破る『希望』を提起する」という問題意識にとっても、より長大な時間幅に立つ後者二つの視点が、非常に大きな意味を持つのではないかと思えてくる。そうした視点を持つことの意味が、クリアに見えてくるのである。そもそも、現代日本社会の閉塞状況とは、「経済成長による人々の物質的豊かさの向上と幸福の増進」という目的の実現の「見通し」が危うくなったこと、災害によって生活が破壊され復興による生活再建の「見通し」が立ちにくいことなどに、主に起因している。それゆえ、この「見通し」を

取り戻すために、再び高い経済成長率や、収入の増加、失業率の低減、格差是正による貧困の廃絶、復興事業の促進等が、求められたりする。「見通し」が立つ条件こそが、「希望」を可能にするのだと。無論、それが実現するならば、閉塞状況を打ち破る上で、大きな効果を持つだろう。しかし「希望」を取り戻す方法はそれだけだろうか。「願望の実現の見通し」が立たなければ、我々は絶望の淵に沈んでしまうのだろうか。

いやそうではないはずだ。私たちの生が死を含みこみながらも「希望」とともにあることが出来るように、仮に「願望の実現の見通し」が立ちにくいとしても、行為しつづけることが可能である。我々の生を大きく超えた時間軸の中で、「我々はどこへ行くのか」を考えることは、人間の短い人生という時間幅を超えた「希望」を持つことを可能にする。その「希望」は、閉塞感をも突き抜けた透明な明るさを帯びているように思う。「社会学的知」の一つの効用は、この明るさにこそあるのではなかろうか。

（えはら　ゆみこ　首都大学東京）